

横芝の碑 (その七十九)

水利の今昔を語る

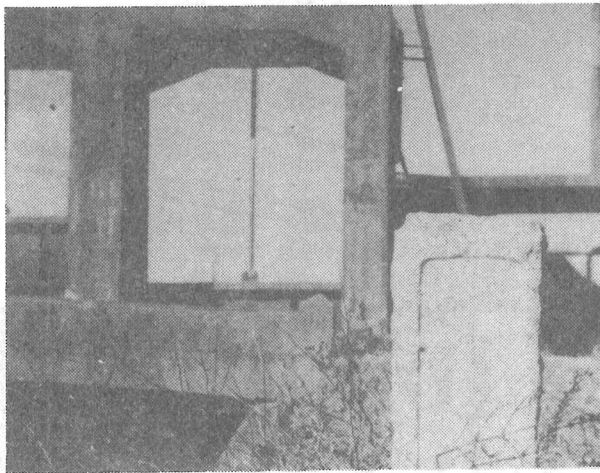
谷台堰の記念碑

横芝町谷台の西側沿に流れる高谷川は、印旛地方から続いている芝山町菱田、岩山附近の緩やかな丘陵地帯の雨水と、滲み出るような僅かな流れが集まって一本の川となり、芝山町吹入、高谷、殿部田、多古町牛尾を経て横芝町に入り、谷台から栗山川に合流していきます。

設けられていますが、そのすぐ下の谷台側の堤の草群に隠れるようにして花崗岩の記念碑が建っています。附近の有識者は「この記念碑は大変な由緒を語るもので、あの意味では向うに建っている水門の記念碑より大事な存在です。」と言っています。

譲らぬ農民の水争い

高谷川の流域は極めて平端で傾斜が殆んどなく、



▲ 谷台堰記念碑 (右手前) と現在の第1号堰

その上耕地の水利は僅かな高谷川に頼るだけなのですが、その高谷川も川底が低いので灌漑の便が悪く、下流で取水のために堰を作らなければならぬ。堰ができる上流では湛水に悩まされるので夜陰に乗じて堰を壊しに行く、下流ではそれを予測

して見張りを立てる、そのうちにお互いが天秤棒や鍬鎌等を持って睨み合うという所謂水争いが絶えませんでした。谷台の産土神様の山土が堰の土俵に使われ、そのお札に奉納されたという参道の石段や庚申塔に延宝(一、六七三、一、六八一)文化(一、八〇四、一、八一八)等の年号が刻まれている所を見ますと、それ以前の或いは天下分目の関ヶ原(一、六〇〇)の合戦の頃から絶えることなく、長い年月農民が生きたための争いを続けていたものと思います。

沿岸に人家の増えるのに連れて争いの集団も大きくなって来ましたが、大勢の人々の中には「徒(いたずら)に争う事の無駄」を説く人も出て来ました。そして天保(一、八三〇、一、八四四)年間に入ると間もなく沿岸の各地区から代表者が出て水争い打開の相談が行われ、「土用明三日後早々堰取払申可候」等という和解書を取交しました。しかし、その後も小さな争いは絶えなまま弘化、嘉永、明治等の時代を経て大正の時代に入り、もう地域反目の時代ではなくなつて来ました。丁度その頃地元出身の県議員の方々の斡旋もありましたので、県の指導による上流下流一本となつての水利組合が結成されて治水用堰門の建設が計画されたのです。相反する利害得失を持つ各農家反応は烈しく、

後顧を憂える論議は百出し、代表として組合役員となられた人々の苦勞は大変で、地区農家の説得に寝食の暇を失う事も度々だったようです。

役員之苦勞実り

木造堰建設

幸いそうした人々の努力と、当時としては近代的な川底に木杭の外にコンクリートを敷き固めて不動柱(水堰板支柱)を差込む穴を作つて不断は堰を取り外せるようにする等の細かい配慮を加えた県当局の指導や県議員さん方の助言宜しきを得て記念碑の下流約七十メートルの場所に出来たのが記念碑が伝える木材を主とした本格的な谷台堰だったのです。当時の模様を知っておられる地元鈴木寛氏(現農協常任理事)は「この辺りは極めて平端で少し低い所でもすぐ水溜りができたものです。つい最近までは大雨の後など牛熊と谷台の間は自転車を通れず担いで渡つたりしたくらいです。そんな訳で上流下流の問題だけでなく、対岸同志で堤の高さを同じにする等の申し合わせもあつた程ですから、県から補助事業として技術指導を受けるまでも役員之苦勞は大変なもので、その人々の顕彰の意味でもこの記念碑は大事にしなければいけないと思います。」と、

記念碑を抱くようにしながら話してくれるのでした。

○写真は上流に向つて撮つたもので、手前の平板のように上部だけ見えているのが記念碑で、実際は角柱です。正面には閘門(こうもん・日本教育新聞社解字漢和辞典引用)竣工記念と刻まれ、その他の面には着工大正十年竣工大正十三年、県補助金五千六百円、総工費壹萬貳百円、大正十三年、谷台、牛尾水利組合之建、工事委員、村長伊藤貞太郎、県議員行方哲次、その他各区長さん方の氏名が刻まれています。後の構造物は現在の第一号堰です。

なお、記念碑は谷台側水門下の堤ですぐわかりますので案内図は省略させて頂きました。

町文化財審議会委員

小沢春光氏寄稿



◎訂正とお詫び

五月発行の広報よこしば一七六号五面保養センター記事、保養センターを保養センターに、同六面自慢あれこれ記事、加瀬芳夫さんを加瀬芳雄さんに訂正します。